



CLA 関東支部情報誌

Vol.22 2018.3

みどりの手帖



特集
ランドスケープのしごと
「若手 RLA のしごと シンポジウム」

津久井 敦士さん 株式会社三菱地所設計
井野 貴文さん 株式会社グラック

RLAの現状と今後の展望について



いきものコラム その22 地下のランドスケープアーキテクト!?: モグラ

みなさんは公園や河川敷で通り一面に小さな土山が林立する光景をみたことはあるでしょうか。これはモグラの塚です。中部地方を境に西にはコウベモグラが、東にはアズマモグラという種が生息しています。塚は目にするかもしれませんが、地下にいるモグラになかなか実感がわかない人もいるでしょう。「モグラ叩き」のようなゲームとは裏腹に、モグラが顔を出すことはめったにありません。



しかしモグラは大食漢で餌となる土壌動物を常に探し回っています。塚の土をよく見ると、乾燥して白っぽくなっていて、黒々しているものもありますね。また面白いことにモグラ

の排泄物に菌糸を増殖させて地表に発生するキノコ(ナガエノスギタケ)なんてものもあります。こういったキノコもまた地下で生活しているモグラの存在を確認する手掛かりになります。

モグラがいるということは、餌となる土壌動物がたくさんいる肥沃な土壌が広がっているということです。都市部ではコンクリート舗装された環境が多く、モグラを身近に感じる機会が減っています。次に塚等を見かけた際には、その位置や方向から、地下に張り巡らされた地下に広がる世界を想像してみてもいいかもしれません。

株式会社ブレック研究所 大森 鑑能

気になるお店

今回はテーマにちなみランドスケープに関する書籍がそろった書店を紹介します。

南洋堂書店

雑誌・新刊・洋書から古書まで揃う建築専門の書店

本の街、神田神保町にある創業108年の歴史ある書店。コンクリート打放しの建物は土岐新氏の設計、2007年に菊地宏氏により1・2階がリニューアルされました。通りに面したフロントガラスからは店内の様子をみる事ができます。

1・2階は、新旧問わず、雑誌や新刊、古書、洋書などがカテゴリーごとに並んでいます。ランドスケープに関係するコーナーは2階にあります。3階では古書を扱っています。お目当ての分野の棚だけでなく、隣へ隣へと見てまわるのが楽しく、手に取ってばらばらとめくるうちに、

読んでみたい本がたくさん見つかります。ウェブショップでも注文が可能なので、そちらもぜひのぞいてみてください。

初めて知った方も、前からご存じだった方も、おもしろい本との出会いを探しに、足を運んでみてはいかがでしょうか。



お店外観

店内の様子

住所 ● 東京都千代田区神田神保町1-21
電話 ● 03-3291-1338
営業時間 ● 月-土 10:30-18:30
定休日 日曜・祝祭日
交通 ● 半蔵門線・都営新宿線
神保町駅より徒歩5分
JR・丸の内線 御茶ノ水駅より徒歩8分
ホームページ ● <http://www.nanyodo.co.jp/>

編集後記

まだまだ寒い日が続いており、仕事も年度末に向けてお忙しいことでしょう。もう少して春がやってきます、もう一踏ん張りです。目標として春になれば何かを始めたいと考えておられる方も多いのではないのでしょうか。春になったら資格取得をお考えになりませんか。どんな資格でも現状の技術水準を確認するためではなく、さらなる技術向上を目指してトライするものといえます。今回特集しておりますRLAは、まさにランドスケープアーキテクトの皆様が、技術水準を高めて頂くために最適な資格といえます。春になったらRLAにチャレンジ!しませんか!最後に、シンポジウムにてお話をいただいた津久井さん、井野さんに、厚くお礼申し上げます。(和田)

みどりの手帖 Vol.22 2018年3月

発行者 (一社)ランドスケープコンサルタンツ協会関東支部長 新井 豊
〒103-0004 東京都中央区東日本橋3-3-7 近江会館ビル8階
TEL 03-3662-8266 FAX 03-3662-8268

企画・編集 和田 淳、加藤 直人、石垣 良弘、泉地 善雄、菊谷 隆、高橋 彩

※転載・転用を禁じます。【表紙写真】/上段:グランモール公園、下段:横浜市庁舎外周プロムナード

RLAの現状と今後の展望について

内藤 英四郎 Eishiro Naito

RLA資格制度運営委員会委員長

● RLAの現状

登録ランドスケープアーキテクト(略称:RLA)資格制度は、平成14年(2002年)に誕生し、今年で16年目を迎えます。平成30年1月現在のRLA資格保有者数は460名で、年代別では40歳代が158名で最も多く全体の34.3%を占めています。次いで50歳代が114名(24.8%)、30歳代が85名(18.5%)の順となっています。

所属会社別では、造園系設計事務所やゼネコン等の造園設計部門に所属する技術者が大半で約90%を占めますが、近年は建築事務所や造園施工会社の職員、行政職員、大学教員などの取得も増えています。

また、所在地別では、東京都・神奈川県を中心とする関東が270名(59.0%)、大阪府を中心とする関西が93名(20.2%)で、関東・関西で全体の80%を占めています。

全国的には、47都道府県のうち29の都道府県に資格保有者が存在していますが、次の18県(青森、岩手、山形、群馬、富山、静岡、三重、和歌山、岡山、鳥取、広島、山口、徳島、愛媛、佐賀、長崎、大分、鹿児島)は不在の状況にあります。なお、平成26年(2014年)に始まった「RLA補」の登録者数は、現在60名となっています。

RLAは、平成29年2月(2017年)に、国土交通省の「公共工事に関する調査及び設計等の品質確保に資する技術者資格」に登録され、これにより、都市公園等の調査・計画・設計業務において「管理技術者及び照査技術者」となる資格が与えられました。

この影響もあり、RLA資格試験の受験者数は減少傾向が続いていましたが、ここ数年は増加に転じており、平成29年度は100人台にまで回復しています。

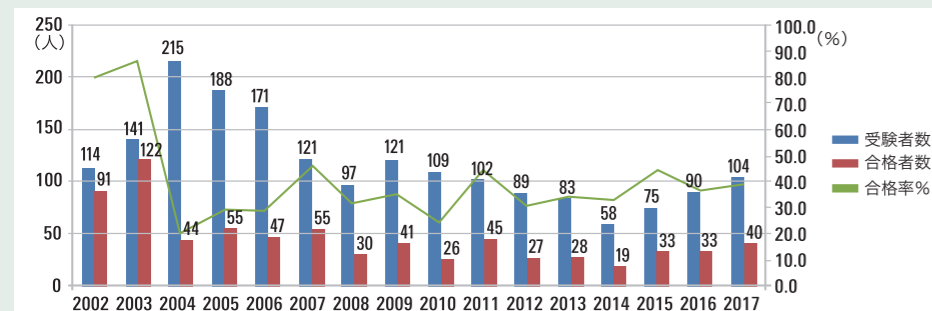


表 RLAの受験者数・合格者数・合格率の推移

● 今後の展望

RLA資格制度の活用については、国の認定から間もないこともあり、全国的な広がりには至っていないものの、プロポーザル等において技術士よりもRLA資格を優先的に評価する自治体も現れるなど、RLA資格保有者を重要視する自治体の動きは徐々に拡大しています。

平成31年度には新元号に変わり、新しい時代を迎えますが、少子高齢化が進行し成熟型社会がより定着していく中で、緑の環境づくり(調査・計画・設計・マネジメント)を通じて社会の安定に貢献し、土地のポテンシャルを高め、人々の生活をより安全・健康・快適なものに向上させていく私達の仕事、RLAの役割はより重要性を増していくと思われまます。

また、外国人観光客の増加などにより、我が国の「緑を取り込んだまちづくりの巧みさ」「自然環境の多様さ・美しさ」「人と自然の上手な関わり方」などが広く海外に認識され始めたことで、今後はそうした緑の環境づくりのノウハウを海外に提供していく役割も増すことと思われまます。

こうした状況を踏まえ、RLA及びRLA補の資格保有者とともに、また、RLAフェローの方々との協力も頂きながら、更なる有資格者の増大と交流の拡大、資格制度活用の広がりに努めていきたいと考えています。皆様方の幅広いご支援をお願いします。

ランドスケープのしごと： 若手RLAのしごと シンポジウム

特 集



「若手RLAのしごと」と題し、シンポジウムを開催しました。若手ランドスケープアーキテクトの育成とその社会的認知及び地位の向上、未来ある若者の意識高揚等を目的として、現在活躍している若手の造園技術者（RLA）の方から作品発表をしていただきました。また、「みどりてまちがどうかかわるか」をテーマにワークショップも同時開催しました。

● RLAとは登録ランドスケープアーキテクト (Registered Landscape Architect) の略称

グランモール公園再整備

津久井 敦士 Atsushi Tsukui

株式会社三菱地所設計 2017年CLA賞最優秀賞 受賞

私はRLAを取得して今年で10年目です。グランモール公園再整備は、2012年10月に基本計画のプロポーザルがあり、基本計画、基本設計、実

施設設計を担当しました。工事を含めると延べ4年半にわたるプロジェクトでした。グランモール公園は、横浜美術館とともに、みなとみらい21地区ができた

時に最初に作られた恒久施設であり、「新しいまちづくりを先導する公園」として役割を担ってきました。四半世紀を経て、地区の開発が進み、公園周りの建物も完成し、「成熟したまち」となったことから、公園が担う役割も変わるという点に注目して、再整備を提案しました。そして「公園の再整備＝第二のまち開き」ということを打ち出し、3つの事を提案しました。

①空間整備コンセプト「ランプリングパーク」

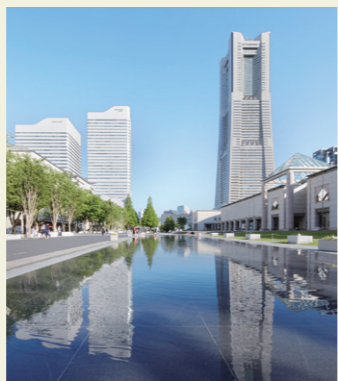
グランモール公園は、地区にある3つの歩行者軸の一つであることから、歩行者軸としての色が強く、再整備にあたっては歩行者軸としての機能を超えて、賑わい、憩いを感じる「公園にする」ことをテーマとしました。また、グランモール公園は当初整備では「ハレの日」を意識した整備がなされましたが、ハレの日の利用を阻害しないようにしつつも、日常利用を促すことを考えました。

②環境未来都市への対応

横浜市は「環境未来型都市」を掲げており、再整備はその実践の場としております。再整備の内容としては、「体感できる心地よさ」「緑と生き物への優しさ」「みらいへのつながり」を設定し、それを「見える化」「デザインの展開」をすることを考えました。基本となる緑量の増加などはしっかり行い、デザインとして昇華することや、見える化やソフト展開に発展されることを考えました。

③「涼しいテラス」の導入

環境未来都市を受けてグリーンインフラの導入を考えました。グリーンインフラとは、



みなとみらいのみずかがみ

雨水流出抑制のために行うという狭義な意味で普及していたところですが、都市公園を中心とした環境改善を行うという広義な解釈を行い、グリーンスマートパークとして提案しました。内容としては、公園全体で水循環のシステムをつくることを考えました。実際のダイアグラムとしては、降った雨が浸透側溝に入ると貯留碎石という碎石層の中で貯留されて樹木の根に浸入し植物の生長を促し、テラスの舗装は保水性舗装とし、そこから蒸発散させる。「涼しいテラス」と名付けましたが、打水効果でかなり涼しくなるという効果にこだわりました。整備後の事後調査では、真夏で、地表面温度で15℃程度、地表面から1.5mの高さの気温で、5℃程度の温度差が見られました。これらのことは、緑化工学会に発表しています。

●RLAとして一番のこだわりと成果

他ではあまり言うておりませんが、こだわった点の一つに、斜面の芝生広場があります。みなとみらい21中央地区の中心部には芝生広場がなく、横浜美術館を訪れる子ども達が、ピロティの石舗装の上でお弁当を食べている状態でしたので、芝生広場の必要性を痛感していました。芝生は、傾斜をつけることで座ることを促すことから、美術館と公園とのレベル差を利用した斜面地の芝生としました。整備後は隣接する地表面の噴水広場の賑わいととも、芝生広場にシートを広げてお弁当を食べているシーンが見られており、うまくいったところのひとつとして、嬉しく感じています。また、その芝生広場にも下層に貯留碎石を採用し、芝生の管理低減も意識しました。真夏でも灌水せずに芝生が維持できていると伺っており、今後も積極的に採用していきたいと考えております。



北側から公園を見る(夜)



北側から公園を見る(昼)

横浜市庁舎緑化再整備

井野 貴文 Takafumi Ino

株式会社グラック 2016年CLA賞優秀賞 受賞

私はRLAを取得して今年で5年目です。この発表の視点は、デザインや設計の考え方はもちろんですが、コンサルティングにも焦点を当てています。このプロジェクトを円滑に進められたのは、関係する4つの部署と弊社で週1～2回のペースで合同会議を開くことで、常に情報を共有しながら、合意形成を図ったことだと思います。初回の合同会議では工事期間約3年で段階整備をどういう順序で進めていくかということ議論し、市民の目に留まりやすく短期間で工事が可能な「関内駅前」から整備を進めていくことを提案しました。

●第1期地区「関内駅前」：これから横浜市庁舎周辺の緑化再生が始まっていくことを周知するため、「ちゃんと空間が良くなりますよ」という意図で、来訪者を楽しませる植栽デザインを行いました。目隠し機能を維持しながら、落葉樹を含めた多様な樹種を組合せた混垣や地被類を植栽して季節の変化を演出するデザインとしました。利用者に心地よさを感じてもらえる空間となり、これをきっかけに市民の理解と行政の信頼・評価をいただくことができました。



来訪者を楽しませる季節で変化する植栽

●第2期「横浜公園と向かいの通路空間」：次に、クスノキの根上りが起こり、プランターが不規則に設置されていた横浜公園側の通路空間を整備しました。横浜公園のスクラッチタイルと大谷石の笠石を用いた壁のディテールを市庁舎側にも展開することで、通りを1つの空間として捉え、まちの通行軸としてデザインしました。

●第3期「くすのき広場」：最後に横浜の都市デザインの起点となったくすのき広場を整備しました。くすのき広場のコンセプトである「市庁舎デザインとの関係を密にする」という考えを継承しつつ、緑のポテンシャルを活かし時代に合わせた空間の再構築を念頭に以下の4テーマを掲げ、設計に取り組みました。

①人と花・緑を近づけるための空間デザイン：植物に近づいて楽しめるような場所とするため、傾斜をつけて手前から地被類、少し背の高い低木層、中木程度の樹木で構成し、植物が目飛び込んでくるような空間としてデザインしました。

②花・緑を媒体とした交流の場のデザイン：現場で撤去したレンガタイルの発生材やレンガを使ったスツールを基本単位として、その組合せの展開で選択性のある5つの休憩スペースを設けました。植栽帯にスツールが入り込む形状とし、腰をおろした間近に植物があることで、植物をきっかけに会話が広がることを期待しています。

③空間と場を支える仕掛けのデザイン：一般的にナツミカン等の果樹はパブリックな空間にあまり植えないと思いますが、歩行者の目を引き、語らいや交流のきっかけになることを期待して果樹を植栽しています。またトレリスに絡めたバラや、多孔質なレンガの隙間から顔を出すツル植物等、時間や植物の生長を「見える化」するデザインをしました。

④植物が生き生きとするエンジニアデザイン：くすのき広場は整備後約40年が経過し、クスノキの生長に伴う根上りが起こっていたため、植栽帯を広げると共に、今後の根の生長を考え、根系誘導耐圧基盤を設ける等、クスノキが生長しやすい環境づくりを行いました。

最後に、植物が魅力的な状態を保っているのは、管理を担当している事業者だけでなく、市職員が進んでボランティアという形でお世話してくれているおかげです。一年草やバラ等の手のかかる植物を植栽していますが、それがお世話のしがいに繋がっているのかなと思いました。場所やそこに関わる人を見極めて、植物のメンテナンスの度合いを考慮して植物を選ぶことも、コンサルタントやデザイナーが考えるべき大切な視点だと感じました。



横浜公園と一体感のある通行軸としての緑



多様な植物を立体的に楽しめる植栽

ワーク ショップ

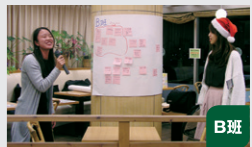
「みどりてまちがどうかかわるか」

講演の後、3つのグループに分かれてワークショップを開催しました。津久井さん、井野さんにも参加いただき、活発な意見交換を実施することが出来ました。

このワークショップ終了後、懇親会にて各グループ別にワークショップでの討議内容を発表してもらいました。発表者に赤いサンタ帽子をかぶってもらい、気分はクリスマスパーティーで、楽しい時間を過ごすことが出来ました。



A班



B班



C班

「どうリノベーションしていくか、最初にみんなで共有化していく」

「みんなの仕事は多様である。会社以外の横のつながりが大切」

「人の絆で今がある。ランドスケープアーキテクトが土地のポテンシャルを見出す事が大切」